正確な事實が段々と知られるにつけ我々はそれらの資料に對して懷疑的な段階に到達してゐる。例へば後岡に於ける層序關係、或ひは鬲と黑陶との關係の如き本書に於いては何の懷疑もなく取扱はれてゐるが、今の我々に取つては其の資料の再批判が根本的な問題と考へられるのである。此の意味で支那文化の科學的研究にあつては先づ嚴密な資料批判がなされねばならぬ。それは極めて平凡なことであるが終始變らぬ根本的な鐵則であることを思ふのである。(Kegan Paul, Trench, Trubner & Co.) (昭四五一)

數學史新講

原種行・清水英一共著

思ふに、數學と云ふ小學問は論理的な學であるが故に、明確な概念を必要とする。從つて、數學に用ひられる概念は抽象概念であり、反社會的術語とならざるを得ないものである。例へば、我々が微積分を學ぶ時に、いきなり變數とか、函數とか云ふ概念をつきつけられることがある。この場合、これを別の言葉で言ひ換れば、それは單に既成の論理的な形態に於て、演繹的なシステムとしての數學を教へ込まれるに他ならないことになる。斯うした數學は、この學の持つ抽象性と云ふ本質に於て、我々の理解を困難ならしめるものである。從つて、數學は必然的に一般的な關心に乏しい結果を生じるのである。

そこで、從來の數學史は、この數學に興味を持たせる課題として提出されたのであつた。併し乍ら、從來の如き數學の學史としての數學史を讀む時に、我々は果して數學に興味を持ち得るであらうか。斯くて我々は數學史が單なる數學の學史であつてはならないと結論せざるを得ないのである。

こゝに於て、我々は數學が人間の思想史に於て一般の思想と關係して、如何に大きな役割を演ずるかを考察する必要に迫まられるのである。換言すれば、それは數學の人間生活に占めて居る地位の考察であり、數學史を動かす世界觀の檢討なのである。

固より、數學者と言つても數學の歷史の中に生れて、その世界の既存關係の中に新しい關係を見るのであつて、全然歷史を離れて其の人が一人で發見したものはない。從つて、發見とは、歷史の中に準備せられて居る所に於てなされるものなのである。

一般に發見と云ふものは、或る事柄が行詰つた時に、天才的直感に依つてなされるものである。併し乍ら、この發見に導かれる道程も隱されて居る道ではあるが、單なる直感のみの所產ではなくして、論理的な脈絡の上にあるものである。從つて、この直感も一般的に關係のある所に働くものである。この關係を具體的に言へば歷史と云ふことになる。換言すれば、如何なる天才人も社會的歷史的環境、卽ち其の時代の世界觀に於て行動して居るのである。

例へば、ギリシア數學に於て比例論が重要視されるのは、ギリシア的世界觀の反映なのである。卽ち、ギリシア人にとつてはギリシアの藝術作品の持つて居るフォームこそ眞實の姿なのであつた。換言すれば、彼等の論理的に把握し得るものは、靜的調和的

な存在に於てゞあつた。所が、之に反して近世數學は、運動を理解するために變數及び函數を中心とする數學であつた。自然は運動し變化する。人間が自然を支配するためには、この變化を支配する法則を知らねばならない。近世數學とは斯うした近世的世界觀の反映なのではなからうか。

この書は斯かる意圖をもつて書かれたものではあるが、其の内容に就ては私の數學知識の缺除のために批判し得ないので、こゝでは唯斯かる書物が出版されたことだけを報告して置くに止めることにする。（賢文館發行、定價二圓五十錢、本文三〇〇頁、索引）（辻本倉雄）

彙報

昭和十五年度史學科卒業論文題目

國史專攻

近世に於ける古典の復興の思潮　朝比奈　博
中古より中世へ、その通路と開展―　今中桂二
中世後期の商業に就いて　遠藤祐正
五音（Pentaton）の構造及變態
―日本音樂史研究序說―　大槻邦雄
平安朝に於ける貴族と音樂
―主として國文學作品に見たる―　正親町公秀
近代日本創出過程に殘せる福澤諭吉の足跡
―人間の探求―　岡本仁
代官制より見たる德川幕府農民支配組織　川村明雄
庶民的世界と中世文化―「勸進」に就いて―　工藤俊一
中古貴族生活精神の展進　兒玉重雄
律令制と其の時代　酒井忠雄
陸海軍の創設過程　近代日本成立史の一定礎　篠崎勝
法然教攷　竹田聽洲
中世の神觀　玉田義美
日蓮上人に關する研究　近田吉夫
元祿期の大阪町人に就いて　夏井太兆
日本資本主義と封建的なるもの　羽生敦
日本近代史概說　穗積重正
復古的精神の展開―中世より近世へ―　横田健一

東洋史專攻

朝鮮塔婆建築史　近藤豐
金代女眞族の漢文化攝取に關する一考察　田中整治
戰國・秦・漢社會の一側面的考察　原八郎
唐代の科擧とその社會的影響　藤原利一郎
唐朝中官領使考　六花謙哉

西洋史專攻

盛期ルネサンスに於ける個人の一問題